

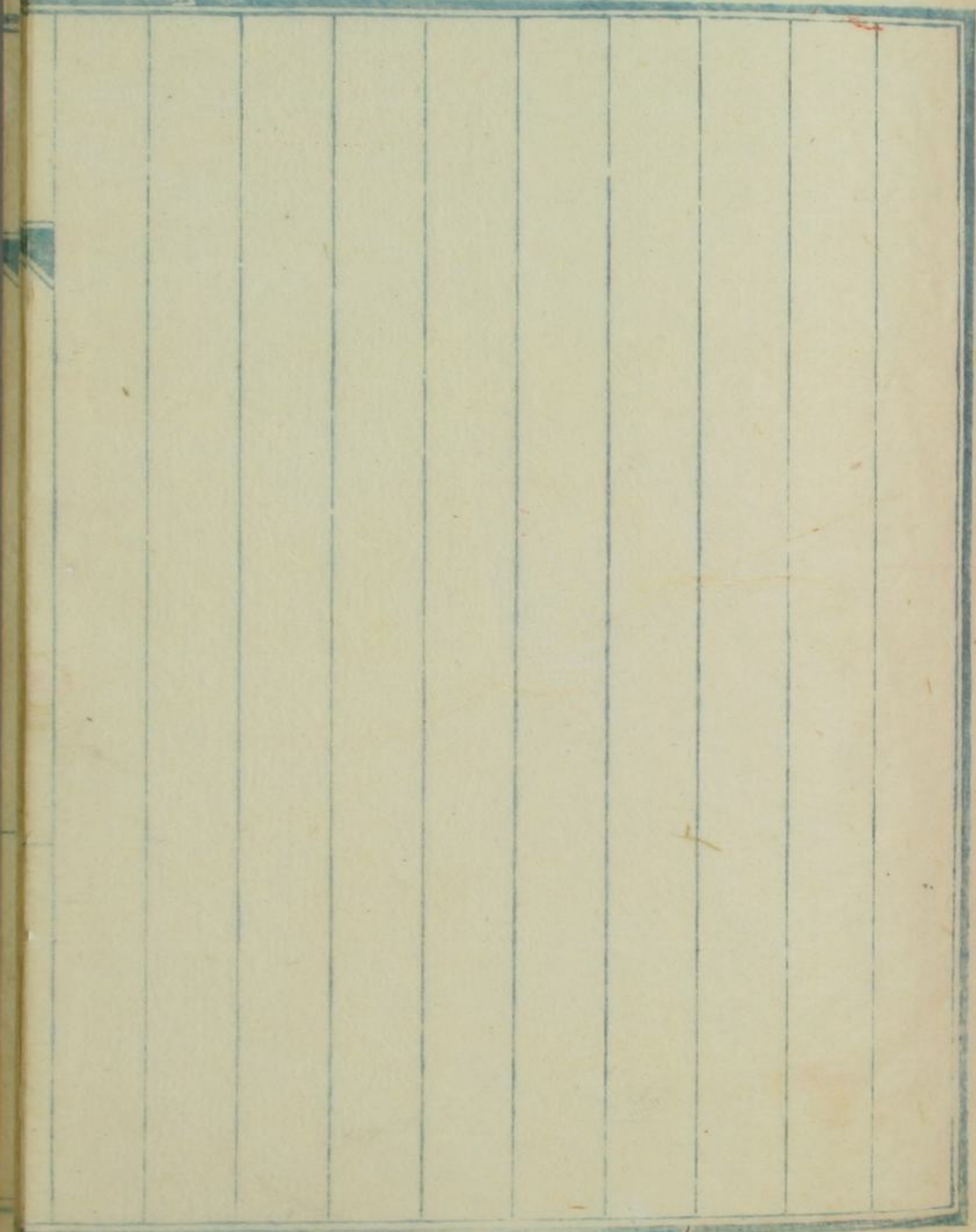
北窓漫筆

柳田文庫  
文庫11  
A1423



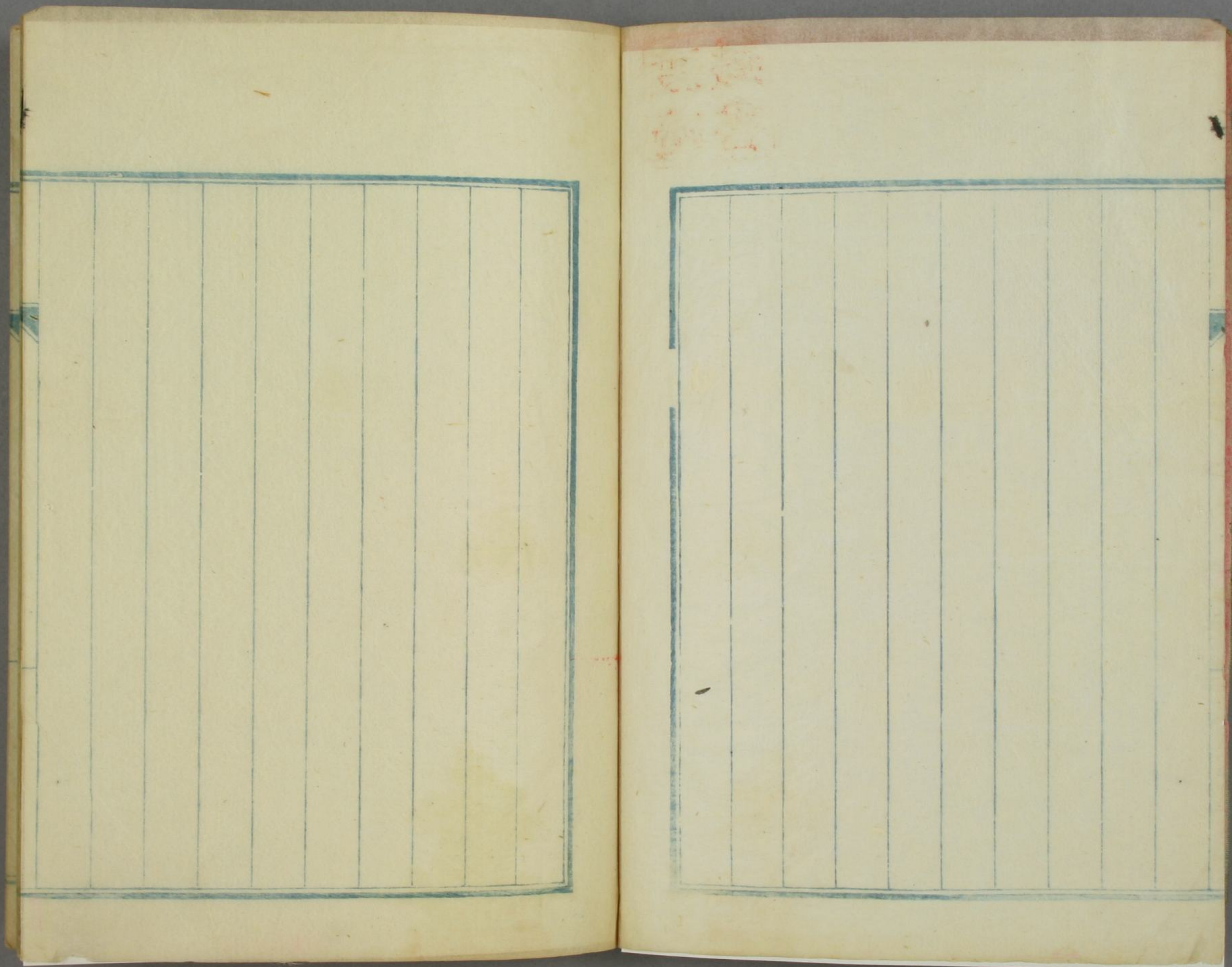


渡邊藏書



特 文庫11  
A/423







北窓漫筆雪之篇第一

明治十七年一月之記

一日 一晴朗昨宵迫ハ左シモ降續キタル雪空モ故ナク晴トシ  
縮葉山上ニ引初ケル霞ノ色モ珍ラシク良長川邊ニ鳴飛バ水禽ノ  
声モ新シク實ニ新年ノ景色瀟然トシテ四海ニ引芽出度アリケル次  
弟ナリ余輩幼ナカリシ頃ハ更ニモ言ハズ年齒十三ノ時夜ヲ負テ浪越  
ル<sup>ル</sup>十五<sup>ノ</sup>年マデ全地ニ年ヲ迎ヘ眼耳ハ濃川多治見村字市ノ君ニ在テ  
屠積ヲ吞ミ今又今年ハ全同麦草ノ地ニ在リテ己カ宿所ニアリモ  
セラ川橋樑峽岸ノ宅ニ年ヲ迎フモ又宿世ノ因縁ナラヌ朝臣カ嚴父





君ト共ニ年酒ヲ廻食セラル、後全氏ト手賀ニ出ヅ、戸部新九郎白ニカ  
ミテ年酒ヲ廻食セラル、午後三時頃、川橋方ニ歸ル座ニ渡邊保次郎  
白アリ、氏ハ當時愛知縣ノ医学校ニ入り居ルト白ヨリ旧友佐々木定一  
氏ノ事ヲ聞キ、轉々懐旧ノ情ニ耐ヘズ、余旅宿(船渡屋九左馬)  
ノ亭主年酒ヲスルム

二日 記事ナシ終日火燵ニ眠ル

三日 終日<sup>春</sup>革若竹(情話ナリ)園々社ニ送ルモノ(ヲ州ス其他ヲ)  
簡ニニ通ラ書ス夜中肉ニ芥ヲ求メテ一杯ヲ傾リ亭主席ニ  
侍ス余興ナキニアラズ

四日 此日共進社日々新聞、削紙式(妙ナ熟字ガ)ナリ出社ス

テ大亀屋ニ鎌谷佐々木川橋、ニ白トキ因リ食ス後途雨見シ

五日 此日共進社新年宴會ヲ本社樓上ニ催ス余又興ハラ得ザリ  
未會スルモノ大向三十五六名田島鹿之助川橋慶次郎ニ白ノ演説  
アリ席ニ待スル、結妓三名一ツツ五ツ云々一ツ照吉ト云ヒ一ツオ吉  
トイフ共ニ三朝樓ノ抱妓ハ五ハ齡ニ十四五ナルマシ美ヲ以テ称スベ  
キモノナラスト云ヒ又擲付スベキモノニモアラズ照吉オ吉又  
至シ宴榻々乱レシトシ戸部氏、手躍リ田島氏、躍舞満座  
リ、聲倒ス余ト碓氷氏ト一足急リ辞シ中村氏ヲ鉄座ニ訪フニ  
アラズ小鴨一頭ヲ肩ミシテ碎歩踰岡鶯谷ノ難路ヲ越テ伊  
奈波ニ出テニ葉座ニ遊ガ老婦勸ケルニ年酒ヲ以テス碓氷白酒



與ニ来シ顔ヲ新飾スルニ白粉ヲ以テス余老婦共ニ之ヲ諫ムレドモ

聞カズ出ラシ西川鎌次 當時國豊座ニ於テ演入心役者ノ一ナリ名ナド  
座ノ産ニ掛ルニテフ年數僅ニハハツ出テス温順

ニテテ美艶余カ未カ曾テ見カレド  
此山ニテ意アリト云フ又故ナキニ非ズ 其旅宿荒川某方ニ行フ乃キ在

リ同儂ナヤ吉 遊巴ニニテ踏ミ近シ無塩又  
更ニ曾テ遊好ヲ加納ニ物ト云 二名ヲ伴ヒ物翠樓

ニ登ル後ハ八重ヲ招リ 二葉屋ノ妹遊テ九  
十分ノ者ヲ帯グ 暫時ニシテ鎌次ナヤ吉

ニ名歸ル乃キ演戲ヲ末廣座ニ見ル市川高十郎ノ一座亦夜

又姫ノ一竹記ヲ演スルモノナリ其中菅蒲又未ル

六日 朝中村氏ヲ訪フ 共ニ鎌  
谷氏方ニ到ル 之ノ前夜兼テノ

在ラズ相尋子ヲ伊奈波ニ到ラントシ川橋氏ヲ訪フ坐ニ國嶋

某アリ中村氏ト共ニ年酒ヲ饗セラルニ醉陶山ニ出ツ佐々木

白ミ蓮ト共ニ鎌谷氏ヲ訪フ未カ歸ラスト亦尋子ヲ伊奈波

ニ葉屋ニ至ル存ラズ歸途菊瓶樓ニ到ル中村氏ノ廻已ナリ

藤田某ノ産ミテ一杯ヲ傾ケテ物翠樓ニ登ル偶々丸井作下

郎玉井伊三郎ノ兩氏ニ逢フ衆團密ニテ享テ聞ク侍妓云ク

豊松 藝妓館ノ妓ナリ性格閑瀟洒ホキ花雪ニ被ブノ風アリ  
多風ニテテ遊ス曾テクハシ早ク情即アツテ勝膠膏ナキヲ 云ク

ナヤ吉 京屋ノ抱妓令而立ニ近シ  
類ハ老練又見ル所アルカ 云ク喜作 三朝樓ノ妓ナリ美艶  
也ヤシ美落而ニ肥ム

ノ風アリ川橋氏曾テ  
之ヲ愛スルト云フ 三妓享園ナル処村願ヲ乾左右米門川橋殿

次郎ニ会未ル中村氏ノ福助躍リ顔ル面白シ將リニ享テ敬セ

ントス偶々別室ヨリ川瀬茂太郎氏余ヲ呼ブ其室ニ到ル坐ニ

八重吉 京屋ノ妓ナリ  
絹ニ見ルハシ マリ又一杯ヲ傾ク後出テ川橋白ト國



豊座ニ見ル由川鎮次ノ一座ナリ鎮次清姫ヲ演ズ越麩  
ノ義兵婚ノ麗人ヲメ伎惚夕ウシム余豈ニ神遊飛越ノ  
思ナキヲ得ンヤ況ニヤ其ノ中技藝云々妙ニシテ柔弱頗ル修  
竹雪ヲ帯ブノ風アルニ於テヤヤ上時宿ニ歸テ居ヌ

七日 早朝本社ニ出勤ス頗ル魚鶴ナキニ苦シム川竹美潭  
ヲ首テス鎌谷氏余ト中村氏トヲ招リ之ニ新耳未ダ酒宴ヲ共  
ニセカハラ以テテリ否取日ノ違約ヲ謝セシカメナリ宴終テ  
ニ葉屋ニ於テ遊ブ梅田英一氏アリ鎌谷氏例ノ如ク貧服ス  
乃今梅田中村ニ氏ト共ニハ八重ヲ推カテ演戲ヲホ廣座見  
ル余同豊座ニ見ント欲セシメ彼等間カズ場中由島氏ニ

逢ニ演ヲ散シテ飯赤廣町ノ吉野屋ニ登ツテ宴ヲ開ク

待妓四云ク米吉 上西屋ノ妓ナリ頗ル  
下等品評スルニ及ラス 云ク小玉 三朝樵ノ妓ナリ  
品評前ニナリ

云クハ八重云ク周吉 藝妓難ノ妓ナリ今三十二年前ラシテ清句ニエシ  
テ華山新結ニ載ル付ルニ秋海棠ノ名ヲ以テ

鎌谷氏之ヲ愛シテ  
寛文三内ノオマリナリ 宴劇ナル頃梶原惣之助氏来ル由島

氏ト口偏シテ坐テ退キ別室ニ御宴ス余等仲裁又一坐トナル

三朝樵ノ担妓才吉待ス余ト中村氏ト一寸目テクハ八重ヲ伴フテ

歸ルナ時ニ西山月痕ヲ掛テ断雲東ニ白ヒ去リ柱頭ノ時辰

三時ヲ報セントス

八日 亭主猪肉ヲ進ム鎌谷山橋ニ氏ト一杯ヲ飲ム

十一日 夜村瀬藪左門 段木高社ノ社員ナリ  
村柄ニシテ落ナリ ヲ菊瓶樽ニ



訪フアリ直ケニ鞠翠栱ニ登ハ秀吉豊松ノニ女生ニ待  
ス三時宿ニ歸ル月色清輝十里ノ路街寂トシ  
曾影寒シ

二十三日 綴テ川瀬谷ト一杯ヲ傾リルノ約アリ相共ニ鞠翠

栱ニ登ル是ヨリ芝キ宮殿正良氏

本葉郡樽見村ノ人ナリ  
字務本宮ノヲ勤ク交ヲ結  
ツル日根野直人  
大野郡三輪村ノ人ナリ  
字務本宮ノヲ勤ク交ヲ結  
深シ性急落ノ様ニ見受ケリ 氏アリテ銀谷

氏ト共ニ余ヲ招リアリ乃ケ川瀬谷ト共ニ至ル豊松ノ席

ニ待スルアリ日野根氏侍アリ余之ニ次酌セシガ悉ク忘

却セリ寡ヲ散シ余ヲ下ラントスルハ別室ニ人アリ

テ余ヲ呼モリアリ誰ツト見シカ当地ノ豪商氏桐原治

郎氏ナリ既悉クニ余ト歳ヲ得ントセウレ余其席ニ至ル  
驛適局ノ官員甚マリ固ハ花月亭ノ妓ナリ觀テ喜  
見ルニ足ラカレモナリ喜  
作ハ重吉ノ三妓アリ隨分愉快ナリシ



二月之部

一日 猿島舟渡屋ヲ轉じて豊島屋ニ移ル中山重清ヨリ  
手休未レ先日ノ興礼ヲ謝スルモノナリ

二日 今日名古屋人ノ懇親會ヲ松畔樓ニ開クト云フ午  
モ行カントヤセシガ己ノ人定ムル旨故ヲ以テ果サス夜國豊座

ニ演戲ヲ鈴木主水ノ実録ヲ演ズルモノナリト云フ場中  
川瀬白ニ逢ヒ散じて稲葉某店ニ温飯ヲ食ス此日晴朗

三日 書ヲ宮殿正民白ニ出ス正午驛過局ノ小殿某及ビ地  
理課ノ芦澤某 共ニ名古屋人ナリ小殿ハ生意氣ニ非ス只好男子ヲ  
氣取ルニ不足取者也芦澤ハ生過ナリト認ム所々

見レニ氏未レハ川瀬白ト四名瀬古ノ支店ニ寓真リ扱ハ芦

澤白去ルニ及ンダニ名演戲ヲ國豊座ニ見ル中村菴十郎

ノ一座ナリ菴十菴四等格々見ルハト云フ他ニ取ルニ  
是ラズ殊ニ演戲ノ仕組ノ如キニ至テハ比難フル所ノミ

然レ面白シマタ々父原内兵衛ト主水ト將サレ屠腹ニテ  
ノ悪人ヲ殺  
シテ以テテリセントスル場及ビ主水己ニ零落シテ乞食社

會ニ入ルモ下僕市助が主ヲ勤ムル場等ハ余ヲシテ  
落涙セシメタリ縮福喜ヨリハ希ヲ取ル場中ニテ清水

某 土本澤ノ如層  
見ルハナリシ 木村方 名古屋ノ人ナリ土本澤ノ  
十層ナリ取ルニ足ルと思フ 二日  
逢フ孰チ木村氏トハ初對面ナリ又後日ヲ期シテ別ル

四日 雪霽午前ヨリ降り午後ニ至テ雪トナリ夜又雨



トナリ川橋氏方ニ於テ午内

四



三月之部

塵事多忙忙に得ずして今に至る雨後  
塵事多忙忙に得ずして今に至る雨後  
心忘しがうんとス備忘心忘しがうんとス  
却て忘る鳴呼余が考も備忘心忘る備忘  
忘る心忘る鳴呼余が考も備忘心忘る備忘

一日晴 余微恙あり食欲進まず舌上厚苔  
生じ喉液時ナリ生じ且つ時々寒慄催る  
ラリハ感冒ナルハ朝芦澤鏡三郎ヲ長谷  
川重元方ニ問フマリ決安敷刺去テ徳文橋  
ニ之ヲ支拂し入去テ雨衣虎雄ヲ豆腐屋ニ

訪フ芦澤未ハ共ニ中肉ヲ喰フ黄昏高ニ歸  
思寒類リナリ直ケハ將ス

二日微陰 恙微快ヲ覺ニホソ離レハ隱テ嘔  
ス偶々佐木秋夫ノ訪フマリ飲茶一ヒ及ビ鶏  
卵一箇ヲ喰ハス白木俊造又未ハ共ニ出ヅ佐木  
秋夫ハ掬翠樓ニ諸用アリトテ去リヌ余モ別レテ  
芦澤ヲ訪フマラズハ橋度政郎ヲ訪フニアラズ  
雨衣ヲ訪フニアラズ清水銀三助ヲ訪フニアラズ是  
非ナリ中敷院ノ風致ヨリ金華山下ニ春也ヲ探  
討シ歩コト東別度ニ至ル斯日石川不足寺ノ企



ニカノル繪畫展覽會アリ大和杖アリ甚か面  
白し見ハ数時間遊ニ展覧會ノ閉會ヲ知ラズ  
後ニ見ヤリシヲ悔ニ兩志見雄ニ會シ三人ノ  
宿ヲ訪フ夜宿ニ歸ル川瀬繁太郎曩ニ浪  
跡ノ行ヒシコロ今日知シリ樋口福次郎中川保  
兩人ヨリ湯磐堂ニ團結ノコトヲ返書ヲ贈シ  
リ夜萬感胸ヲ刺シ眠ル能ラズ三時ヲ報ルル  
迄ハ覺ノタリ兩声杖ニ降ガ實ニ遊子心  
ヲ傷マシムルノ致ナリ

三月三日 此日本縣通常會ヲ開ク余例ノ通

リ倚聽記者タリ午後六時ヨリ兩志見雄ト  
共ニ徳文樓ニ登ル山縣屋ノ額杖五代ヲ招リ  
乃チ来ル全妹ノ妹タキナルモノ今日来リシ由ヲ  
以テ共ニ来ル致テ一場ノ奇災アリ何レモ鼻  
日々新聞ニ廣告スルノ心得ナリ二枚額ル美ニ  
シテ艶玉ハ性情倏々ハ温順實ハ一奴ノ美玉  
ト謂フベキナリ宴室ナハ処指本樓ノ絃妓宜  
吉ヲ招リ是又見ルベキ者ナリ隣室ニ京屋ノ  
八重吉アリ數回余ノ席ニ来ル宴ヲ散セシハ  
ニ午後二時頃兩志見雄ノ宿所ナハ豆腐屋



三將又今日ハ近赤ニナキ愉快ナリシ

四日 朝芦澤鏡三郎ヲ宿ニ訪フニ神ルヲ  
差シテ出祭セリト云フ安見ニ無情極ル奴ト  
云フハシヤシク依頼スルコトアリテ翌日ヲ田島  
鹿之助中村実速ニ贈ル本日雨

五日 記事ナシ

六日 倚聴ヲ了ヘテ旅宿ニ歸ラントシ雨夜  
庚雄ヲ訪ニ在リ共ニ山月亭ニ至ラ中肉ヲ喰フ  
歸途山縣屋ノ門前ニ至ル偶々五代ハ福以前  
キナハニ逢フ纏綿シテ共ニ遊ハシテ乞フ乃チ  
モハニ

諾リ雨夜庚雄ヲ携ヘテ徳文樓ニ登ル又偶々  
豊松ノ同族ニ在リアリ并セテ招腹ス宴ヲ  
散シテ歸途ニ白ヒシハ十二時頃ナリシ

七日 別ニ記スハキナシ兩東島村ニ至ル記行袖  
中記ニ記セリ

八日 全無

九日 朝田首官藏ヲ旅宿玉井屋ニ訪ヒ  
英談數刻偶々歸ル後雨夜庚雄ト共ニ瀬  
古ノ支店ニ至テ寫影ヲ取ル後梅林ニ遊ハ  
ントシ徳文樓ニ至ル五代ハ福ノ二妓ヲ腹入  
ニアラス窟吉来ル初更月ヲ踏ニテ歸リ山



歸屋に至り色々事ヲ嘆クベリ斯夜  
雨森虎雄ノ宿所ニ居ヌ

十日 雨森虎雄ト山月亭ニ牛肉ヲ喰  
ヒタリ

十一日 記事ナシ

十二日 別段記スルコトナシ

十三日 黄曾ヨリハ福五代ノ二妓ヲ伴ヒ徳  
又樓ニ登ル五代先ツ歸ル乃チハ福ト對坐  
醉ヲ買フ愚顛々々トナリテ歸途ニ向ヒ  
シハ初ニ十二時ノ近シ雨森虎雄ノ家ニ居

又

十四日 雨森虎雄ノ家ニテ牛肉ヲ喰ヒ市村  
某ト三名歩ク梅林ニ向リ林中村瀬藪ニ登  
ヒタリ汝地ニ至リシトキ是ニ黄曾ヨリニ  
シテ直チニ歸リ暮ヌ官服正シキ

十五日 雨森ヲ徳又樓ニ寄リ會スルモノ度也  
松茂岡島官藏ハ橋度次郎佐ト木村丈隼  
谷磯北及ビ余トス終妓ニ云ク五代云ク梅吉  
稿本ノ妓等リ別品ニ云ク小豆一盃ハ美艶一  
ニテアツカレナリ一盃人ヲ及徳夕ウシム  
ニ朝梅十時頃宴ヲ散ズ松茂ト共ニ諸ニカヲ  
物妓



散步之雨夜度雄方之泊ス

十六日 雨夜方ヲ辭シ渡之朽葉ヲ旅宿  
山形厚ニ坊フ丈シヨリ浩戯左ニ記載ス  
竹ヲ見ヨ

有所約

時惟明治十七年三月十六日有得齋觀梅之  
約余早朝侵曉烟而訪黃薇子々尚未  
離床見余到狼狽沒顏未而坐主婦佈  
以醪馮朝酒三杯頗絕佳矣乃命猫酌及酒  
看于京橋屋與黃薇子訪磯北氏在馬所

以左遺氏女猶托社用而欲辭者生等於  
爰書出一訂謂云今已命京橋屋以某手陽  
丈人共行焉君不行則不童生等遺憾亦  
將受恨于丈人君清涼意未嘗磯北公如忽  
然未意云可行焉々々之生等已攜一酒友矣  
又訪岡崑氏於玉井屋是亦全意西酒人互推手  
而到梅林頭竟無庵々童在倚告以有所約  
然一々室猶有餘裕者強移々室搆陣待大  
凡三時間兵甲便意中暗生疑鬼或可有可  
福壽者或有長待却而有趣者時已細雨濛々



掃前林去兩字景色頗絕佳矣偶見幼車  
東之末山前何處是手跡所愛之顯姓王  
代也律之而入坐未矣五代素產於浪越江山  
父稼川手甲斐十郎勤町役人五代幼而夫母罹  
于繼母之手育及長而嬌艷秀他工顰妍笑  
艷慧非凡非凡芙蓉如面柳如眉秋水為  
神玉為骨薄施淡掃固賞嬌嬈感服亂  
頭也饒蘊藉穠纖合度修短得中漫言  
粉琢香堆成之不易就使脂煇鈿暈畫  
也都難計年則同桂魄之方盈尚字則待

瓜期而未許例之如梅花初而開笑于夕陽春風  
之裡管兒含笑而吹金衣于晴香映影之間  
性恬憐滿酒敢與他之柔妓不同是深余所  
以愛鍾也矣坐中已有此春矣只恨酒看  
無技與五代寧意自侵雨中而至福壽栢  
携大根柏付與一本酬酒未焉又暫而一妓未  
福本樓之久知也與黃薇白親此時磯北為  
意中不平在馬華陽不未也華陽其干量衣  
折命之酒看未矣歸飲及黃豈而歸系  
橋厚屋笑



丈ヨリ京橋屋ニテサニ次會ヲ開キ時十二時ニ至ル  
ニ及ンデ山形屋ニ黃蕨付ト同宿ス

六月記事

一日晴天風アリ粟本權吉昨夜ヨリ未訪シ

テ終日遊ビ居タリ午右永井靖九郎未ル余ト

福井銀太郎

全宿人ナリ本縣ノ准等外費用掛ナリ  
永松候戸田女實ノ陪臣ナリ性情濟ニ似タリ 及ビ秋

山俊男

收被屬十五等官相者ナリ  
中々面白キ人物ナリ 就身又豊 同十七等官相者ナリ  
例ノ名五厘人種

推シテ知ルルニシ  
但シ中々面白キ人

ト共ニ漢ヲ曰長良川ニ河ク銀鱗金尾獲

物大テカラ不余福井ト定ニ待ツノ約ヲ為シテ歸ルオ一町頃

ニ至ルモ未ラス一壺ヲ知多酒飲シ効ニ爲ス乃ケ鶏肉ヲ取メ

テ固ガ福井ノ名ト一杯ヲ傾ケ舞ハシ教ク斯日忠節様ニ廻

火アリ之レ昨日ノ遊様可而ニ直フテ残りタルヲ拵打シテリ書日



ヲ梶田常吉服部園竹市橋龜吉春陽金吉等ニ贈ル  
混浴エニ於テ飯辰某ニ逢フ

二日 晴天朝書ヲ江馬浩堂戸田女寛渡部汝鷗東  
海新南社ニ贈ル歸社寓宅ニ歸ルハ札七ニ尺鉤アリ福  
井ヨリ余ニ書送モノニテ濤外山外山五舟五舟ノニ吟交余ヲ  
招ク乞フ山田屋中竹屋ニ来シト余乃チ行ク聽テ又  
福和多久ノ抱妓アリ市松相半前ノ抱妓ヲ招ク愉情ハシ  
席上濤五ノニ吟交ト狂詩ヲ唱和ヲナス筵ヲ散メ  
後再ハ京橋屋ニ登リ更ハ房吉和多久ノ抱妓老練  
ヲ駛ス後余ト福井ト三妓ヲ伴テ伊奈波ノ春日ニ氷ヲ

喫ス者ニ着シハ十二時ニ近シ夜半留アリ雨又降ル

三日 晴天午後ヨリ鎌谷龍男甲島鹿之介龍

ト角カヲ伊奈波ニ觀ル中々面白シ園部川ト平ノ元

トヘルヲ西関トス表ノ戸ト呼ベルカ士腹上ニ立付テ

乘七餅ヲ搗カセ或ハカ士五名ヲ肴アル等ハ余ヲメ

後ニ堂暖セシム常陸鴻ト平ノ戸トノ組合ハ人ニ汗ヲ

握ラシム黄白宿ニ歸ルテ口堪平田某ニ逢ヒ酒ヲ吞

リ莖陽ニ弟ハ米極枝其他名ナキノ妓輩文々座ニ来シ

四日 晴天歸社ノ後松韻東海ノニ友ト決活ス偏々



清外公の訪ハルハ一四ノ鶏肉一升ノ醇醪僅カニ酔リ  
買ヒ浮世味ニ時ヲ福シテ壽メ大垣江馬治堂ヨリ  
返事来ル

五日 晴天記事ナシ戸田女貫ヨリ返事来ル

六日 曇天黄昏東海公邸ト長良川ニ散步ス  
渡邊汝鶴ヨリ返事来ル

七日 晴天詩ヲ依ツテ深更ノ到ル空腹ヲ食メ  
一タシハ福井ト魚松梅ヲ至テ一杯ヲ傾リ微酔  
シテ歸ル

八日 晴天朝亦高お食ニテ佐々木秋夫公邸ノ訪フ

アリ東海公邸ニ相携フニ中教院ノ裏ナリ甘山ニ散步ス絶  
景ヲ言ヒシガナシ悠遊ノ夏山新緑ノ好色花時ノ優  
麗カヲ秋まゝの細辛を拖リ東海公邸ニ赤石と拾ふ  
独リ伯叔と遊ビて殊薇をとりし由又一興歸途  
長良堤を經て秋まゝの宅ニ至リ前々お数杯を玩し  
歸ル事と秋山清外公邸ノ許ニ来ル云ク舊日訪ル  
事曾前果シテ来ル詩翰數次一四希一洒壺ヲ傾リ  
見玉舟公邸又来ル福井ハ四名團密宴ヲ南ノ隣室東海  
公邸方ノ中村旭上子来ル余兩家を送レ後坐云ク趣ク又  
一杯ヲ傾リ加ふる云ト福井トノ衣袋ニ梅又東海ノ數



晴中ニ暮カレハ何ツヤラト九ナ九路

九日 晴ト暑トノ中向ナリ朝旭止子ト云テ出ツシ  
ハ東海流ニ出社セシトス旭子怒リテ云ク彼レ其  
駒ノ片朝暮ヲ以テ鳴ルノ人ナリナリ一時高チ鳴リテ  
カセリニ今四ノ早起驚クハシ四子其ノ力能ク大男  
ヲ左右スト全呵トトメニ大ニ技相奪ルハニ出社ス歸社  
物宿モトスルニ奴軍ノ攻劇甚シ乃チ草踏ヲ投シテ  
脱走漸ヤリ新帳ヲ塞トシテ暖ヒコトヲ得ケリ  
十日 午ノ頃ニ時過ク秋山ハ暮ナリ後ス  
松翁又意ニジキタナニ義ヲ起シ圍

ヲ中ノ中ニ名リシテ鳥ト酒トテ同途  
セシム事 陽ニ暮ル松翁ハ鳥圍ヲヒタリ由テ  
之ヲ油ノ一盃ヲ飲ク迄ルニ涉ル未タ帰  
色リクニサス松翁之儀ス時ニ一耳ノク  
一時ノ鐘聲ヲコラニ 忽チ其ニツク  
微ハ方ニヨクトナフ女ハ其ハ其馬ヲキ  
蹴起ル松翁ヲ呼フ其ヘモサリ肩ヲ振リ動  
戸ヲ開キ雲ハモ火執カク望ミマス又床  
ハルニ午ノ時ニ報ス  
十一日 微曇ニ午ノ時ヲ淡ク見ハ新



身をま福井をぬく時声して驚馬を漸く  
 床より出テ嗽し掃し飯こつク松石佛に  
 小言り鳴りて白く朝、如キ疾く起  
 キ出ル山をて馬を牽くニキナラズヤト  
 岡島を之ラ登りて各悠々出テ帰ル、及こ  
 テ福井のテ朝已く長ク始メテ至  
 ル出テ済し時掃り見し九時半ト士  
 ミ一分大スサ蓋しし雷大朝暾ヲ見ル  
 缺ハサハツナリ夕日東ヲ散チ五舟ヲ  
 定ルモ人備存多キ出テ福井ト余

ト其他法ヲあらする、復々益し見習  
 ントハハナリ、福井一掃、一掃ヲ傾ク  
 余モ又之ヲ受ケ半ハシテ、大ニムセ、晩  
 合止、蓋ハハサコリし一粒、飯、菓子、四  
 ツ、福井、あちち、菓子、菓子、菓子、菓子、菓子  
 余々、夕、飯、こ、テ、存、笑、ス、飯、尽、キ、帰  
 ル、~~内~~、即チ、愉快、ヲ、感、サ、セ、ト、ス、ル、思  
 考、先、ツ、抽、籤、ヲ、当、リ、シ、者、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十  
 知、ラ、サ、ル、真、似、シ、テ、使、ヲ、以、ス、ル、約、ヲ、ナ、ス  
 コ、ア、之、コ、カ、ヨ、ル、弗、々、カ、言、ト、共、コ、上、リ



大伊。時々  
珍。思。黙。々。

酒のや卯し者より依り礎の執り福  
井より招かしに其の旨三十分許り  
舞屋出極りナし傍より團扇にニホ  
きし日似愚顔付三親々。土屈迫胸み  
可憐極上 斬りこし。福井不知強し  
テヨあり大長ヲナし。文福より招く  
来。十二時の過り。歌り。唱へ。管  
ヲ弄セス。一笑。一後。興極ラ。ス。笛  
ヲ吹。仰。纏。頭。ヲ。投。セ。ト。ス。婢。顧  
ミ。ス。踊。起。共。ニ。手。ヲ。拍。テ。第。一。

至。七。福。井。文。福。に。招。信。し。テ。日。后。日  
共。に。纏。頭。り。呈。て。納。メ。テ。又。好。勝。笑  
有。り。ト。云。フ。時。毎。月。台。り。出。ス。仲  
巳。山。形。や。塚。と。云。ん

十一日 記。ゆ。ナ。し。秋。山。最。末。に。深。更。ニ。至  
テ。歸。ル。寒。々。お。毎。々。

十三日 歸。社。途。東。海。旭。上。の。二。公。前。に。稻。葉。滿  
額。寺。及。日。決。山。ノ。夏。山。新。緑。雨。後。ノ。新。髪。ヲ。梳。リ。見。ル  
種。磨。ノ。山。前。に。至。ル。余。ヲ。呼。バ。モ。ノ。アリ。懸。テ。面。ニ。之  
ヲ。見。し。心。事。ヲ。知。故。縮。先。ナ。リ。直。々。ニ。歸。ラ。ン。ト。ス。稻。本。様



ノ前ヲ送ガ豊松梅枝ノニ好アリ「コソツト」ノ面ヲ余ト  
旭上家トシテ贈ハ之ヲ被フテ九家ニ至リ知ヨク好一書ヲ  
命ビテ歸ル路上ノ見量ヲ叙リニ異様ヲ笑フツルニ歸  
シハ福井方カシニ秋山鶴見ニ寄来テ吟ヲ試ミニト欲  
スト余等書ニ直字會ノ集チマリ乃チ今日ヨリ以テ初日  
トス中「同島」福井ニ去ト島内ニ行一盃ヲ傾リ鶴見  
ニ吟友来ル之レヨリ直リ他日書テ吟詩ス又一集十二  
時散會セリ

十四日 黄昏ヨリ雨降ル白木後ニ東梅寂ノ  
命ヲ受ケテ牛肉ヲ取メ来ル余モ又倍メ食フ田

玉竹本名松  
木蝶名五座  
天場町三之印  
銘本代、養  
三女アリ

余ニ表シサハ土曜口ニ非サレハ里牡丹ノ味ヲ詠ム  
ル能ハクア、ソウニ我々今日口懇然會アリシテ福井  
松畔村ニ至ル歸後自余ノ愛妓ナリシ玉竹ノ蝶  
泣ス余又旧塵ノ香初ラ慕フニ苦シム事々中歴々彼、  
美貌眼ニ入リ来ルア、隨意ナラヌ世ノ中かな

十五日 早朝ヨリハ後四篇ヲ抄ス黄昏鶴見五  
舟家余ヲ招ク之レ詩會ヲナサントニナリ福井ト行リ往  
ニ寄由書アリ本島ノ遊チ等外先生ナリト余初メテ  
面ス其信便ノ事ニテ如何ナルヤハ知ルニ申サント島内  
先ツ又ハ竹コテハ嬌ニ高ツリ嬌ニ直身アリ色氣



夕ツプリ勢ヲ為慢ノ甲アリ梳ニ思フ余故ニ浮リ  
流ラズ鶏肉及びカ臭ノ馳走アリ吟詩ニ三篇ニテ  
歸リ来ヌ

十六日 黄昏ヨリ降雨頻リテリ歸社ノ後中村家  
ノ方ハ東海ノ家ニ行ク大根のちろしみて一杯ヲ傾リ裁  
判所ノ書託実お基来レ能ク流ル碎ニ棄心大雨  
ヲ心シテ歸途ニ向フ天駒橋の前ニテ推乃世ノ書  
巾ヲ遺す困難極リナシ宿所ニ歸シバ清外翁ノ  
政野半仙ト来テ鶏肉ヲヤラカニ流レリ曰り余ノ  
歸ルヲ待テリト聲中紅襦ヲ之乃チ又福ヲ招ク

ニトスルニ宿娘逆サズ乃チ出テバ日科平橋ニ至ル秋山  
ノ家ニ歸リ又福房吉梅枝梅本ノ枝美ニメ湯海田  
名も屋藩士ハ野菜ノ次  
サテリマハ世ノ常ニハ豊松、箱吉名も屋藩士ハ野菜ノ次  
ナリマメト呼ブ又一笑ルレ耐リテ福ヲ房老ハ流ス類リナリ  
又福縁コノ家ノ書アルモノハ此レ自物ニ  
アラズ余ノ傷ニ来ル  
余書ニおト流レ流リてんヲ以テ吾ノ字ヲ出セシカ知  
テニノ傳ヲ去ル余方しくき望セリ店ニ時鐘是ノ  
テ舞ハ時ニ一時陰雨甚シク中情ノ雨圓ヒモ斯ツト  
思ハル  
ナセリ 記多クナシとつおとけしく持ぬ



青月 十八日 オトナシクおやそみし  
りわん

十九日 微曇 晚鳥 帰山 坂弓 梅林、サ  
安、目的ヲ以テ 福井ト共ニ 赴カトシテ  
路傍ナルヲ以テ 中村旭上氏ヲ訪フ 岡島  
氏来ル會シ 鳥ト酒トテ 一杯始リ 居ル処  
之ニ 幸ヒト 福井ドウ思シ 坐シ 就キ一  
談一撃 幸一 笑シテ 杯ヲ傾ク 凡ク 呑ム  
一升 強 醉 陶ラサシム 飯ヲ 食ヒ 茶  
ヲ 飲シ 衣ヲ 脱テ 箱 籠ニ 入リ 帰ル

和為文ノ 妙ニ ち 声 女 孫 娘 ト 呼ビ  
帰ル也 横ニ 在ル

廿日 雨 滂沱 此日 愛岐 幸ニ 舟 社 々々  
海ノ 上 虎 歩 及ヒ 官 吏 尾 岡 某 永  
尾 某 某 某 一 官 女 ヲ 開ク 一 款 一 酬 杯  
盤 狼 藉 酬 ナリトス 福井 帰ル 七 二 終  
系 橋 本 上 人 妓 文 福 招キ 又 方 飲  
帰ル 二 時 九 時 一 時 二 時

廿一日 微 曇 雲 甚 矣 如 坐 鷄 中 一 松 生  
文 作 君 来ル 松田 行ヲ 約シテ 帰ル



又渡りて虎の谷に來りし其思自福井前  
 約り踏ミテ松野に至ラレトス予未  
 客アルヲ以テ果カク由テ一策ヲ出し  
 忽々歸ル一言ヲ遺し福井ヲ追テ來  
 ル平橋に遇フ其に松生して之を携  
 へテ松平に及ミ橋ス  
 一声嬌啼叫惠來早伴風清涼之動  
 処把一盃新茶來進之獻面顏推  
 笑顧盼一回逢々欲去乞斷曰待者  
 未

右十八日已未ノ記事福井醉舞ノ末心テ記ス  
 所故、得漏ナキ能リ不仍テ左ニ復載ス

十八日 歸社ノ途路野沢金一ホ放ト号ス東京組合什言人未テ余小甲津之國

ニ高ス性夜  
候後快 訪ス生ニ磯北旭止ニ公阿リ談笑數刻  
 鶏肉ヲ御食セラル杯一杯献酬掌時微醉黃昏相推カテ  
 縮世ヲ敬歩セントス乃今春日店ニ於テ氷ヲ喫ス余金時  
 ニ概ヲ食ス偶々内外ヨリ福井松野赤ル旭止公阿大者縮本  
 ヲ觀ミテ豊松ヲ呼ブ彼茶ニテ來ル後々善支寺堂ニ詣  
 テントシ余モ隨伴セヨト云フ流ニテ行ク衆猜疑ス又其  
 理ナキニ非ス瓜田ニ靴ヲ入シ不季下ニ冠ヲ正カスト又互ナシ



哉豊杓余ヲ見ル同胞ノ弟ハ如シ馬又豊杓ヲ見ハ  
強シト抑ノ心地セリ人見テ事ハトナス寃ヲ解クニ  
苦シムニ後出テ栂葉山ニ至ル磯北谷例ニ依テ燧屋  
ヲ訪仰余等又後殿ニテ入ル所ニテ馳走又一與アリ  
後相推テテ栂田様ニ登ル樹々々々情筆紙々々々  
難ニ帯ニ石地ヲ踏ヲ以テ縛名トセハ葛蒲モ又ニ字  
ニテヘウ 躍ヲナス隣室ニ松下辰雄アリ鶴者ト  
飲リ鶴先余ヲ見テ暗ニ心ヲ動カニ似タリ(直リカ)  
余モ快々リリ只席上福井ナキヲ憾ミトセリ出テ  
諸氏ト袂別シ葛蒲兄弟余ヲ伴フテ米屋町ニ別

ル早猪繼行高ニ歸ルハ柱頭ノ時辰鶴々トシテ土時  
ヲ報セントス

十九日 醉筆ニテ別々ナシ

二十日 午前八時出社栂々々時ナラントス湯々名刺  
ヲ投シテ湯ヲ訪フモノアリ誰ツト見レハ是レ六年前  
名古屋ニ日普社及び環々社ヲ創立セル際相知ルノ  
人波初良太郎ナリ相迎ヘテ旧事ヲ話ス強シトニ時  
尚今夜ヲ期シテ別ル後歸ル相待ス黄昏果シテ同  
友尾岡常太郎ト共ニ来ル中村又在リ一杯一肴ヲ出ス  
余興ニ乘シテ録言披露一坐ヲ廢ぶ栂柄永井請セリ



夫り余を扶るルニ都、一点振ノ事ヲ大ニ六共ニ扱  
リノ事ヲ收シ思メヨト云フニアリ、正字ノ事ヲ大ニ解、  
トシテ出テ高橋屋ニ登ル、福井約シ居フルトアリ且ツ  
人ヲ遣スルニ是レ一坐ノ戲禮又教テサカハツキナシ  
鏡ヲ父福ヲ垢リ乃チ来ル彼大ニ余ニ喜アリ余碎  
倒ニ婦女ト戯ル、下ニ是レ父福ノ乳ヲ咀フ、袋一袋ニ  
其後ノ事ヲ忘却ス、書ルニ思ヒルニ時頃、歸宿、  
即一泊ス

二十一日 微曇、火ニ熱甚シ日没前、五舟、  
帰ニ書リ記セヨト余喜ムト、惡筆ナシ、氏、  
由

ナリ揮毫ス折柄、海皮、虎カ、即、  
ト、松野、羊、仙ト、福井ト、松田、  
ヲ、欺、ヒテ、出テ、松野ト、  
ニ、妓ヲ、腹入、豊、  
キ、ニ、花ト、云フ、ハ、  
見、  
テ、  
ル、  
カ、  
お、



興六十一三枝ヲ出ツ偶之雀五ヲカリニ来ん乃々豊  
松ヲ伴ヒ稻葉ニ至ル水元ノ前ニ山住持の下婢甘茶  
逢ヒ馬御氣ヲリテ噴クナカウ善光寺前ニ至リ  
心付ケハ福井松野ヲ居ラズ依テ稻石橋ニ至ル松  
野アリ豊松ヲ推乃ハテ母口鼻平橋ニ登ル鼻水之極  
ムハカク不ノ右言ニ尺キニニヤ多興火ナシコト下婢  
ニ一丈婦アリ極雅衆吸余ノ意ニ違セリ出テ、稻本  
橋ノ前ニ至ル偶之永井清九ヲ水元ニアレニ合フ傍  
ニ葛蒲アリ余ノ師長ニ驚クテ笑ニニ松野ト柳  
弓矢ニ至ル余生シテヨリ楊弓ヲ理ク今日ヲ以テ

始メトス

二十二日

陰晴定リナシ本日ヨリ臨時縣會ノ書記ニ  
登ルルノ約アリ早朝録念白ヲ訪ヘハ左ノフシ圖テ大  
立腹之余ヲ責ムラハ然レ氏余儀多尙ホ至コカリシヲ  
以テ大ニ責後トシウレシ桂子ナリ暫時ニシテ由爲復之  
即遊子度太郎未會ス後徳又橋ニ登ル録念白ヲ  
述自多ノ世流ニテ抱フ處入レトセハ枝山花ヲ招ク即  
チ赤ハ美艶比ナシ愛嬌溢ルニ似タリ庭中ノゴウ  
別ニ記スハキトト呈氏田島啓之助ノ具行遊劫  
度太郎ノ跡果実ノ見ルヲ厭フ井上忠曾寺衛來ハ



スハリ角カニ剛強ナリ田島常フテ敗ヲ取ル  
テ数回後々妓女王指本林ニテリ老物常テキヤナ  
津手梅ゆしと勤めしとふ酒満性快  
余席ニアルハ八時酒ヲ吞ヤテ其量トシテ酔ハス  
辭シテ歸リキお旭上公取ヲ訪フニアラス

二十三日 岐阜縣臨時會ニ於テ余例ノ如ク本社ヨリ  
傍聴ニ出サレ別段記スルキナシ中お申典物出シ  
尋シラレ

二十四日 縣會ヨリ歸ルニ會書記柳橋某傍聴  
筆記ニケリルヲアレハ余ト引合セヨトテ余ノ汗ニ  
至ル中お申ト一杯ヲ傾ク陶然醉ニワリ

二十五日 前田松二郎ヨリ書判ル。本日岐阜高

工會開場式ヲ行ハルニ付編輯課一同取次ヲ辱セシ  
ヲ以テ余も岐阜學校ニ至ルニ亦已ニ海ニシ後ナリシ  
ニゾ中お家ニ伴ハシ開場ニハ伊奈波社事務所ニ至ル會  
スルモノ縣令郡長勸業課長ナリトス他ニい当地  
ノ高カ高渡辺平田高橋岡本村瀬堀田近藤夕初メ  
無慮ハナ余名坐定ツテ酒肴ノ出ルアリ岡本會社  
ノ軸山水ノ幅アルヲ見テ笑テ云ク本會社上ニ其甚カ  
クヲケケ宜シク百足ノ圖カ高故ノ幅コソヨテレト  
是蓋シ擲込ムニ切ミナルヲ以テナルハシ能ク多シ  
リト云フハシ遂ニ羊ハナラントスルモ一叙禪ノ来ル



ナニ重法一箇ノ馳走実ニ巻ト云フベシ縣令笑テ  
云ク妙術ニ高工會ナレハトテ馳走ノナキニハ驚キ  
入ルト又一笑スルニ耐タリ無キテ歸ルアリ辭ニ乘テ  
伊勢島夜ヲ啼フアリ中村翁ト一足早ク松森林ニ至リ  
ニ次會ノ支度ヲ為ス赤ルモノ渡也甚吉平田 能谷孫六  
即岡本正樹加納村ノ千種甚外敷名ナリ結妓夫レニ  
曰リテヤキ曰クハ王曰クハ三放歌スルヲシバ手躍リヲナ  
スアリ三結偉カク渴ンデ鼓出デ中村翁ノ福ハ躍リ  
止メバ平田氏ノハラ〜出ヅ酒一杯ヲ呑ム毎ニワ  
ト悲鳴ノ下學ニ對テテ雜言ヲ吐クモノハ旭上氏ナ

リ端唄ノ声音ノ美ヲ誇リ妓ノ顔ヲ見テ微笑ス  
ルモノ鉄庵細島ナリ神樂太鼓ヲ叩キハラ〜ヲ躍  
リテ口ノ働クヲ止メガルモノハ平田氏ナリ次々歌ハク  
酒ヲ呑ムモノハ渡邊氏ナリ酒ヲ呑マズ有テ喰ハズ復似  
日出ルモノハ能谷老人ナリテヤキヲ相テニ高島ヲ  
シテ独リ面白カルハ千種隱居ナリ只酒ヲノミ飲ミ  
人ト混ラズ歌ヲ唄ル妓ト言ハズニコク〜トシテ  
愛嬌ヲ溢スハ金澤ナリ已ニテ一人去リ二人去リ遂ニ  
坐中余ト岡本翁ト旭上漢史ノ高軒ニ寄ルアリ  
ノニ尚淡笑數刻時已ニカニ時ヲ報ルコトス旭上



漢字も借り起しし陰雨と候しし朝霧りし一夜  
の二時頃と云ふこと

旬日紀行

余家事ノコヨリ六月二十六日ヨリ武儀郡牧  
溪ニ至ル七月三日歸社ス其間殆レド一週間翠  
鬢蒼松天竺ニ興フルニ蒲味ノ景ヲ以テス我々之  
ニ答フルノ蒲西ノ紀行ヲ以テセカハラ得ズ乃チ  
旬日紀行一篇ヲ百十ス因ニ云フ余客年浪花ニ  
遊ヒシトキ事ニ觸レ物ニ感スル毎ニ作ル処ノ詩  
平上ノ二韻ヲ踏破ス今又去入ノ二韻依

テ作ルニノナリ然リト是ニ住ク他約ノ詩ハハ蒼

松ノ中ニモ偶ニハ花ノ美ヲウカレハカウカシツナリ

六月二十六日 微曇 浅井白ト共ニ芝草病後ニ到リ佐し

大埋白ニ面會シ去テ牧溪ニ向フ

誰云出遊在翠春烟霞作痼疾難真漢村標共推

山翠尚媚塵仙區裡人

蒼標翠松還可乘出遊信似櫻花亭離愁

名恨友人無双燕頻催筇後送

程ナリ明テ橋ニ至ル橋上却尚ハ壽美ニ逢フ橋上

又左ノ馬詩ヲ得クソリ



ハ鳥三四戲微瀾三復置翁到後看綠蔭影多亭  
若水漢翁得意下魚竿

曇雲湧影天兵縫翠蕩紅烟空後旋渾沔思波幾  
ハ鳥啾々似唱舞平鴝

明七橋ヨリ人車ヲ賃コテ行ク行クテ教所曉  
天挿秧ノ時之際ニ滿田蒼々早番トル乙女子ノ  
謡モ頗ル珍ウシ。

相見人間勿也因缺針風裡短裙新帶情猶思惟  
能解一樣烟雲二樣人

人車飛ぶが如り瞬間一色坂ト呼ハル所ニ達ス

此処ヨリ以後人車通切カト至暗中之燈ヲ失セ  
之ノ思ヒナキ能ハカハモ是非ナク降車シテ數  
キ、酒ヲテ取ラス觀ニテ浅井女ヲ見ル、前後  
別行ホカ其影ヲ見ズ佇立左ノ愚詩ヲ得タリ

短衫遠去金華巷寂寞山寺紅淚降從是詩

苦辛又馬由得仙人轡

傍ニ一老農アリ余ニ尚フテ云ク先生(田舎ノ人  
次ニテ書生ニ似タルアルハ直テニ學校教員ト  
見做ス又一笑スルニ堪ハタリ)何処ニ行カント  
又昔今此坂ヲ遊ヘント欲スルナリ乞フ案内セ



ニト金入ニ喜ビ獲フル所ノハ皮囊ヲ托シ尾シ  
テ行リ逢中左ノ悪詩アリ

教町多ウ行リ己ニメ一ハ村ニ云フ之レ一色村  
ナリト村石ノムサリ口ニキアリ一徳清井女ヲ  
待タントシ老叟ニ銅泉ニ個ヲ與フ是レ共幣ニ  
酬スルナリ尾草子ヲ命ス云リナシト鶏卵マハ  
カニウナシト是非ナク美淋酒一椀ヲ飲之且ツ

カニ一椀ノ濁酒ヲ與フ彼欣喜言打鳴ラシテ香  
ク一笑悪詩アリ

村店曾無飲食費疎餐ニ悲傷購胃蒼頭田漫又  
堪憐香芋風魚初美味

程ナリ洗井女未ル乃々携ヘテ行リ行リ二里  
寺尾ト移フル所ニ出ツ















ヤナハ  
之平宅  
りて着  
顔から固  
るのよま  
守り津  
と所より  
固まりく

ヤナハ

このまゝの本文に平四郎

常かきまじりて  
くくく知史の事平太事書の本

ヤナハ

あつちを  
いれり  
あつちを  
いれり  
あつちを  
いれり  
あつちを  
いれり

ヤナハ

あつちを  
いれり  
あつちを  
いれり  
あつちを  
いれり  
あつちを  
いれり

甲の

ヤナハ

あつちを  
いれり  
あつちを  
いれり  
あつちを  
いれり  
あつちを  
いれり

ヤナハ

あつちを  
いれり  
あつちを  
いれり  
あつちを  
いれり  
あつちを  
いれり

ヤナハ







蕨城  
高野原

井川  
屋敷

廿二

森に降りて簡けぬのふらひてなま  
とて月下におたの田か

廿三

快心と男とて世の世を  
かため馬のまをたの田か

廿四

敵陣中とまひみる山中  
陣路の

廿五

森に鳥首其里の下よこを  
捕くらしと

廿六

同陣かろと

廿七

友陣森にを陣たつれ  
勤り  
首さあらしと

廿八

急やとかれと  
あはれし



右腰の目  
城の城代と  
しこ建つる

廿九  
左腰の拍子する奥の角のふ城せよ  
と今年す

廿十

茶にのめするに並として奥を抱  
りそをすくはく敵の敗北大將は死  
と知れせらるるアハハハ

廿十一

右腰の茶に自給せんとするを  
留めすりく敵の敗れせらるる

廿十二

右腰の城の城代と人びを殺す

廿十三

右腰の城の城代と人びを殺す

廿十四

右腰の城の城代と人びを殺す

廿十五

右腰の城の城代と人びを殺す

廿十六

右腰の城の城代と人びを殺す



三三〇 川原に深淵ありて屋敷ありて  
てありてあまの持ふて侍ちしめを  
し。

カキ

只れい愛あらしくや林をりて  
笑ふにありておのれを  
めを侍ちしめ

カキ

見らばおのれを侍ちしめ  
ておのれを侍ちしめ  
侍ちしめ

カキ

川原に深淵ありて屋敷ありて  
めと侍ちしめ

カキ

乙子や中流に  
秋ありて

カキ

西陣にありて  
リ十四日  
乙子や中流に

カキ  
花を  
初



おれも野ざらし

ヤコチ

丁々 繁矢 丁々 矢こよめ 代時 羨  
を一月あひせし

ヤコチ

二刀あひせて之れも 創ゆるや 採る  
得たりと 歎い 林を 穿つて 立出れば 我  
かまき 一人の 娘 女

ヤコチ

ヤコチ

君ひて 立寄く 彼ら 女を 加えん

とて 中...と 驚き 体

ヤコチ

おれも だ—— おれも だ あい どうし たが  
夏から くのり 虫上り 豊相 友い おお  
の 教い 何んと 消つて 面い 笑う 影  
て きのり 山へん とす くれを 林の 隙から  
中へ 待て 女 馬の

ヤコチ

大田 園とす



申所  
桐葉を  
箱の抱く

婿の後のみ  
信のつらふ  
お桐のあふ

秋の初風  
使実山嵐  
五郎  
四十五六

同人娘  
お秋  
十八

同人後妻  
お鎌  
二十

あま花田屋  
山次郎  
二十八

お依梅鉢  
お細  
二十九

同人悴梅鉢  
お幸  
三十二

二の儀浪を乗  
お女房  
おは

お一田  
山次郎  
お若木  
おの  
おあ  
お婿  
お若木

お藤の落葉  
お金太郎  
お若木  
おの  
おあ  
お婿  
お若木

お二  
お若木  
おの  
おあ  
お婿  
お若木

お身  
お若木  
おの  
おあ  
お婿  
お若木

お金太郎  
お若木  
おの  
おあ  
お婿  
お若木

お若木  
お若木  
おの  
おあ  
お婿  
お若木

お若木  
お若木  
おの  
おあ  
お婿  
お若木

お若木  
お若木  
おの  
おあ  
お婿  
お若木

お若木  
お若木  
おの  
おあ  
お婿  
お若木

お若木  
お若木  
おの  
おあ  
お婿  
お若木







つたつちのち酒樽のめらふてをを申ふ程  
なつ西人ともつたつちのつたつち

カナ

お杖進つたつちのつたつちのつたつち  
の首を梅鉢の送らつたつち

カナ

此をあらして袖のつたつちのつたつち  
直つたつちのつたつちのつたつち

カナ

二人の首をさる梅の海はつたつちのつたつち  
梅鉢

ほちりてつたつちのつたつちのつたつち

カナ

乾見大鏡が竹鏡席旗を掛つちのつたつち  
のつたつちのつたつちのつたつち

カナ

つたつちのつたつちのつたつちのつたつち  
のつたつちのつたつちのつたつち

カナ

お杖進つたつちのつたつちのつたつち  
のつたつちのつたつちのつたつち







幸の成りたる一筆

母

梅の香の集りて

花の香の集りて

花の香の集りて

花の香の集りて

花の香の集りて

花の香の集りて

花

花の香の集りて

花

花の香の集りて

花の香の集りて

花

花の香の集りて

花の香の集りて

花の香の集りて

花

花の香の集りて

花の香の集りて



Handwritten text in a cursive script, possibly a name or title, starting with a large initial character.

Handwritten text in a cursive script, continuing the previous line.

Handwritten text in a cursive script, continuing the previous line.

Handwritten text in a cursive script, continuing the previous line.

Vertical handwritten text on the right margin of the left page.

Handwritten text in a cursive script, starting with a large initial character.

Handwritten text in a cursive script, continuing the previous line.

Handwritten text in a cursive script, continuing the previous line.

Handwritten text in a cursive script, continuing the previous line.

Vertical handwritten text on the right margin of the right page.



Handwritten text in a cursive script, possibly a name or title, written in dark ink on a light-colored page.

Handwritten text in a cursive script, possibly a name or title, written in dark ink on a light-colored page.

Handwritten text in a cursive script, possibly a name or title, written in dark ink on a light-colored page.

Handwritten text in a cursive script, possibly a name or title, written in dark ink on a light-colored page.

Handwritten text in a cursive script, possibly a name or title, written in dark ink on a light-colored page.

Handwritten text in a cursive script, possibly a name or title, written in dark ink on a light-colored page.

Handwritten text in a cursive script, possibly a name or title, written in dark ink on a light-colored page.

Handwritten text in a cursive script, possibly a name or title, written in dark ink on a light-colored page.

Handwritten text in a cursive script, possibly a name or title, written in dark ink on a light-colored page.

Handwritten text in a cursive script, possibly a name or title, written in dark ink on a light-colored page.

Handwritten text in a cursive script, possibly a name or title, written in dark ink on a light-colored page.

Handwritten text in a cursive script, possibly a name or title, written in dark ink on a light-colored page.



全切腹 田島 氏 氏

母の 一 子 子

佐馬の 佐馬次 三本橋の 信 年 年

右 姓 田 十 田 氏 氏

右 孫 中 里 子 田 氏 氏

女 房 中 里 子 田 氏 氏

田 氏 氏

父子 田 氏 氏 田 氏 氏

田 氏 氏 田 氏 氏

田 氏 氏 田 氏 氏

田 氏 氏 田 氏 氏

田 氏 氏 田 氏 氏

田 氏 氏 田 氏 氏

田 氏 氏 田 氏 氏

田 氏 氏 田 氏 氏

田 氏 氏 田 氏 氏

田 氏 氏 田 氏 氏

田 氏 氏 田 氏 氏

田 氏 氏 田 氏 氏

田 氏 氏 田 氏 氏

田 氏 氏 田 氏 氏



Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged paper. The script is dense and fills most of the page, with some lines starting with larger, possibly decorative or initial letters. The text is oriented vertically on the page.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged paper. The script is dense and fills most of the page, with some lines starting with larger, possibly decorative or initial letters. The text is oriented vertically on the page.



怒怒命の帝の初為精年終の年終

富の由るはしるゝおち者、昔葉の年終の

終本野の命を、東の精の年終の

終本野の命を、東の精の年終の

終本野の命を、東の精の年終の

終本野の命を、東の精の年終の

終本野の命を、東の精の年終の

終本野の命を、東の精の年終の

終本野の命を、東の精の年終の

終本野の命を、東の精の年終の

終本野の命を、東の精の年終の

終本野の命を、東の精の年終の

終本野の命を、東の精の年終の

終本野の命を、東の精の年終の

終本野の命を、東の精の年終の

終本野の命を、東の精の年終の

終本野の命を、東の精の年終の

終本野の命を、東の精の年終の

終本野の命を、東の精の年終の







大勢が整すにけり。もて文を讀むとや。

大團圓

大勢が整すにけり。もて文を讀むとや。

大勢が整すにけり。もて文を讀むとや。

大團圓

大勢が整すにけり。もて文を讀むとや。



お夜よりの

沖中 悪者の者三郎おん人におち夜をり

こちのしんせうのちんせう

沖力 じつと申す事おめが我屋のじ

入こちのしんせうのちんせう

沖中 生おち夜をり

~~おち夜をり~~

おち夜をり

沖中 けいせいのしんせう

とちのしんせうのちんせう

おち夜をり

おち夜をり

おち夜をり

沖中 けいせいのしんせう

おち夜をり

おち夜をり

おち夜をり

おち夜をり

沖中 けいせいのしんせう

おち夜をり







伊人廻付本

男爵の御名

福島の御名

目録の別冊

福島の御名

福島の御名

福島の御名

福島の御名

福島の御名

福島の御名

三十八

男爵の御名

福島の御名

福島の御名

福島の御名

福島の御名

福島の御名

福島の御名

三

福島の御名

福島の御名

福島の御名

福島の御名

福島の御名

福島の御名

福島の御名

福島の御名

福島の御名

三

三



Handwritten text at the top of the right page.

Handwritten text in the first line of the right page.

Handwritten text in the second line of the right page.

Handwritten text in the third line of the right page.

Handwritten text in the fourth line of the right page.

Handwritten text in the fifth line of the right page.

Handwritten text in the sixth line of the right page.

Handwritten text in the seventh line of the right page.

Handwritten text in the eighth line of the right page.

Handwritten text in the ninth line of the right page.

Handwritten text at the top of the left page.

Handwritten text at the top of the left page.

Handwritten text at the top of the left page.

Handwritten text in the first line of the left page.

Handwritten text in the second line of the left page.

Handwritten text in the third line of the left page.

Handwritten text in the fourth line of the left page.

Handwritten text in the fifth line of the left page.

Handwritten text in the sixth line of the left page.

Handwritten text in the seventh line of the left page.

Handwritten text in the eighth line of the left page.

Handwritten text in the ninth line of the left page.



海岸より身を投げんと思ひしつらう

沖三十一 土を引くことめり種もをましく  
きりに送りやらんとあまの命を喰ひ表ひ  
けぞくあつあつあつと

沖三十二 ちあちあちと金に定ん歸るおれ  
をぬり流さつてゆる金にさそひて  
つらう

沖三十四 棲みまきく驚き後悔の体  
逃げんとくめげさくはばすと恨むを  
あまのちをすしめ

沖三十五 真い引渡けたわがハのわ  
こりやかせつとつふ時利のひこい大妻と  
こまろ行く

沖三十六 金次ハのた人行き流すハ  
今夜ま待ちとらめとつふを歸る

沖三十七 ハの福を呼び大妻のちを  
あちつとつあ福子申すのあらし

沖三十八 福子 金次ハの行かぬあ  
死な悪くあし 蔵のよふ所  
沖三十九 ハの金次つとつい先利流

福が甘ん  
水くま体







知敬如泛泛接實有禮病

光不可繼

知敬如泛泛歲末端

多似送昏旭芝管日穆

丙光

多似送昏旭芝管日穆

声中又歲端分節梅  
枵空乞嫩西情西表  
岳頌寒長  
今如土產熟以煙自  
者起多年故鄉真  
嬉春如海樂園乘











其也若お 須くとも 即ち 重相  
九の字又 神ありの 信也 重相  
相の名に 義也 重相  
此の字も 亦 重相  
也 形も 名 重相 重相  
重相 重相 重相 重相  
白珠 高底 之人 重相 重相

重相 重相

重相

十二 腰之 重相 重相 重相 重相  
十三 重相 重相 重相 重相  
十四 重相 重相 重相 重相  
十五 重相 重相 重相 重相  
十六 重相 重相 重相 重相  
十七 重相 重相 重相 重相  
十八 重相 重相 重相 重相  
十九 重相 重相 重相 重相  
二十 重相 重相 重相 重相



















燕

勝を以ててくくを城といふ

四六 陸木情を以て築つた(中略)

お勢多内を以て評するに判情を以

し色々といふ浦川を以て築つた(中略)

下るそこ(中略)梅野を以て築つた(中略)

西人浦川儀を以て築つた(中略)

ふ(中略)築つた(中略)

四六 築つた(中略)

ら(中略)の(中略)の(中略)

い(中略)の(中略)の(中略)

ら(中略)の(中略)の(中略)

陸磨次郎

有秋次郎(中略)名(中略)次郎(中略)

美の為須(中略)候(中略)者(中略)年(中略)田(中略)考(中略)号(中略)先

同(中略)高(中略)田(中略)お(中略)の(中略)大(中略)地(中略)ゆ(中略)し(中略)金(中略)輪(中略)林(中略)之(中略)助

考(中略)つ(中略)ま(中略)妹(中略)の(中略)子(中略)

内(中略)務(中略)有(中略)矣(中略)る(中略)の(中略)定(中略)め(中略)り(中略)也(中略)

考(中略)つ(中略)ま(中略)妹(中略)の(中略)子(中略)

考(中略)つ(中略)ま(中略)妹(中略)の(中略)子(中略)

保守の極

同(中略)大(中略)平(中略)の(中略)敷



十五 本屋に書架を置きて之に大らふ及  
對面をもちかくし

十六 櫛をとりしてまき舟の名を置  
するまのまめ印刷して本屋に置く  
いづれ書架ありてまき舟のまめ

十七 聖書にまつてかくるまき舟のまめ  
仙道紀といふ書に大つまき舟のまめ  
行きて自首すといふまき舟のまめ  
十八 國の入りておちりてはまき舟のまめ  
果ててまき舟のまめをまき舟のまめ

此のまめ

十九 本屋に書架を置きて之に大らふ及  
對面をもちかくし  
いづれ書架ありてまき舟のまめ

二十 本屋に書架を置きて之に大らふ及  
對面をもちかくし  
いづれ書架ありてまき舟のまめ

二十一 本屋に書架を置きて之に大らふ及  
對面をもちかくし  
いづれ書架ありてまき舟のまめ























三廿四 舟の浦にたれと聞かす

廿五 梅の浦にたれと聞かす

廿六 舟の浦にたれと聞かす

廿七 舟の浦にたれと聞かす

廿八 舟の浦にたれと聞かす

廿九 舟の浦にたれと聞かす

三十 舟の浦にたれと聞かす

三十一 舟の浦にたれと聞かす

三十二 舟の浦にたれと聞かす

舟の浦にたれと聞かす

舟の浦にたれと聞かす

舟の浦にたれと聞かす

舟の浦にたれと聞かす

舟の浦にたれと聞かす

舟の浦にたれと聞かす

舟の浦にたれと聞かす

舟の浦にたれと聞かす

舟の浦にたれと聞かす

舟の浦にたれと聞かす

舟の浦にたれと聞かす

舟の浦にたれと聞かす

舟の浦にたれと聞かす

舟の浦にたれと聞かす

舟の浦にたれと聞かす

舟の浦にたれと聞かす

舟の浦にたれと聞かす







廿三 夕顔生 田の如く 夕顔の如く  
しとも 霞をいぬと 暮る夕顔の如く  
夕顔の如く

廿四

夕顔の如く

月の如く

廿一 夕顔を 動前 働 暮る 夕顔の如く  
廿二 夕顔を 動前 働 暮る 夕顔の如く  
廿三 夕顔を 動前 働 暮る 夕顔の如く  
夕顔の如く

廿四 夕顔を 動前 働 暮る 夕顔の如く

廿五 夕顔を 動前 働 暮る 夕顔の如く

廿六 夕顔を 動前 働 暮る 夕顔の如く

廿七 夕顔を 動前 働 暮る 夕顔の如く

廿八 夕顔を 動前 働 暮る 夕顔の如く

廿九 夕顔を 動前 働 暮る 夕顔の如く

三十 夕顔を 動前 働 暮る 夕顔の如く

三十一 夕顔を 動前 働 暮る 夕顔の如く

三十二 夕顔を 動前 働 暮る 夕顔の如く

三十三 夕顔を 動前 働 暮る 夕顔の如く







半本ありて一冊を二冊のちも移らんと

書

才二子 隣にふるむるまは

才三子 才二子のち移す

才四子 才三子のち移す

才五子 才四子のち移す

才六子 才五子のち移す

才七子 才六子のち移す

才八子 才七子のち移す

才九子 才八子のち移す

才二子

才八

才九

才十

才十一

才十二

才十三 才十二のち移す

才十四 才十三のち移す

才十五 才十四のち移す

才十六 才十五のち移す

才十七 才十六のち移す

才十八 才十七のち移す

才十九 才十八のち移す

才二十 才十九のち移す

才二十一 才二十のち移す

才二十二 才二十一のち移す

才二十三 才二十二のち移す

才二十四 才二十三のち移す

才二十五 才二十四のち移す

才二十六 才二十五のち移す

才二十七 才二十六のち移す

才二

才三

才七







この書は、*the* *history* *of* *the* *British* *Empire*

十一

に於ては、*the* *British* *Empire* *is* *the* *most* *important* *part* *of* *the* *world* *today*  
 最も重要な部分である。今日の世界に於ては、*the* *British* *Empire* *is* *the* *most* *important* *part* *of* *the* *world* *today*  
 最も重要な部分である。

十二

また、*the* *British* *Empire* *is* *the* *most* *important* *part* *of* *the* *world* *today*  
 また、*the* *British* *Empire* *is* *the* *most* *important* *part* *of* *the* *world* *today*  
 また、*the* *British* *Empire* *is* *the* *most* *important* *part* *of* *the* *world* *today*

十三

また、*the* *British* *Empire* *is* *the* *most* *important* *part* *of* *the* *world* *today*  
 また、*the* *British* *Empire* *is* *the* *most* *important* *part* *of* *the* *world* *today*  
 また、*the* *British* *Empire* *is* *the* *most* *important* *part* *of* *the* *world* *today*

また、*the* *British* *Empire* *is* *the* *most* *important* *part* *of* *the* *world* *today*

菊令 此書は、*the* *history* *of* *the* *British* *Empire*

十一 全編

この書は、*the* *history* *of* *the* *British* *Empire*

この書は、*the* *history* *of* *the* *British* *Empire*

この書は、*the* *history* *of* *the* *British* *Empire*

この書は、*the* *history* *of* *the* *British* *Empire*

この書は、*the* *history* *of* *the* *British* *Empire*

この書は、*the* *history* *of* *the* *British* *Empire*



廿五 若後より来る女

廿六 ちやうどおちの体

廿七 ちやうどおちの体

の安

廿八 ちやうどおちの体

父の体

廿九 ちやうどおちの体

徳隆ちやうどおちの体

ちやうどおちの体

ちやうどおちの体

廿十 ちやうどおちの体

ちやうどおちの体

廿十一 ちやうどおちの体

一 ちやうどおちの体

廿十二 ちやうどおちの体

ちやうどおちの体

ちやうどおちの体

廿十三 ちやうどおちの体

ちやうどおちの体

廿十四 ちやうどおちの体

ちやうどおちの体



廿八

廿九

三十

いそとゆき  
とあひま  
つけえん  
あゆむ  
すんぶん  
あつた

せうじ

十六 ちんちんおきりしむき入る

とらふとせうじ

十七 ちんちんおきりしむき入る

一件

十八 ちんちんおきりしむき入る

強請り

十九 ちんちんおきりしむき入る

間をちんちんおきりしむき入る

二十 ちんちんおきりしむき入る

四

五

六

對面乃をらりて法りて

廿一 ちんちんおきりしむき入る

谷堀りちんちんおきりしむき入る

傍のちんちんおきりしむき入る

廿二 ちんちんおきりしむき入る

堀端のちんちんおきりしむき入る

ちんちんおきりしむき入る

ちんちんおきりしむき入る

廿三 ちんちんおきりしむき入る

ちんちんおきりしむき入る



















とてしるす

かこ 八丈と花を掛るSの口と  
ふらふらとてえらふとて  
Nの口と

あま かりこの口と

たをたの口を 山形を

用人印石を

庄内印石を

かたがたの口を

同 口を

慶 田 界 二 三 四 五 六 七 八 九 十

一 山形 二 花田 三 花田 四 花田

五 花田 六 花田 七 花田 八 花田

九 花田 十 花田

十一 花田 十二 花田

十三 花田 十四 花田

十五 花田 十六 花田

十七 花田 十八 花田

十九 花田 二十 花田

二十一 花田 二十二 花田

二十三 花田 二十四 花田

二十五 花田 二十六 花田

二十七 花田 二十八 花田

二十九 花田 三十 花田

三十一 花田 三十二 花田











Handwritten notes at the top of the right page, including the number '200' and some illegible characters.

Handwritten text in the top section of the right page, starting with 'Handwritten text'.

Main handwritten text in the right page, written in a cursive style across several lines.

Handwritten characters 'Handwritten text' located between the two pages.

Main handwritten text in the left page, written in a cursive style across several lines.



此の世に生れしは... 此の世に生れしは... 此の世に生れしは...

中八 義成... 此の世に生れしは... 此の世に生れしは... 此の世に生れしは...

識荆 何銀... 此の世に生れしは... 此の世に生れしは... 此の世に生れしは...

此の世に生れしは... 此の世に生れしは... 此の世に生れしは... 此の世に生れしは...

此の世に生れしは... 此の世に生れしは... 此の世に生れしは... 此の世に生れしは...



親方所

天正

未中

東三子肉堀之目々當由地

若あひら平

静室馬場所八十九

天正

梅子

音已 齋谷仲之所  
音 平 子 多 田 田 田  
部 部 某 場

17/2/13/6







